

2023年2月26日（大齋節第1主日、A年）

牧師メッセージ

「荒れ野にて」

（マタイによる福音書4:1-11）

司祭ヨセフ太田信三

アダムとイブは、善悪の知識の木から食べてしまいました。これは、「食べると必ず死んでしまう」と神が言った実です。善悪の知識を知り、神のようになりたい、そのような存在になりたいという願望が人間の奥底にはあります。意識しないまでも、そのような存在に気づかぬうちに惹かれてしまう、とも言えるかもしれません。こうして、神に背いたアダムによって、すべての人が死に定められてしまいました。しかし、神は死刑を執行することはありませんでした。アダムとイブを楽園から追放しつつも、その命を奪うことはしなかったのです。いや、追放というよりもむしろ、着物を与え、アダムとイブを楽園から「送り出した」とすら読むことができます。ここに、神の深い人間への憐れみと慈しみがありません。こうして人間には、荒れ野で神に立ち返って生きるチャンスが与えられたのでした。

アダムによって、すべての人間が死に定められました。しかし、同じ一人の人間によって神はすべての人間に救いをもたらします。その人こそ、イエス・キリストに他なりません。洗礼を受け、霊によって荒れ野へと導かれた主イエスは、アダムとイブが追放されたのと同じ荒れ野において、アダムとイブの背きとはまったく逆に、悪魔の誘惑を受けながらも、神への従順にとどまりました。そして、この主イエスに天使たちが従いました。これにより主イエスは、楽園追放以来荒れ野でさまよう人間に対し、神に信頼して生きるなら、荒野であっても人は再び神と共に生きることができる、ということをもって示してくださったのです。

こうして、同じ一人の人によって、わたしたちすべての人間に、再び神とともに生きる道が開かれました。主イエスが受けられた誘惑の一つひとつは、わたしたちの日常に溢れているものでした。それはつまり、わたしたちの日常は荒れ野なのだということです。大齋節、わたしたちはこの荒れ野に自分自身が生きていることをあらためて確認し、日々襲ってくる誘惑と向き合います。そして、そのなかにあっても、主イエスに倣って神への従順の道へと歩み直したいと願います。